福岡大学病院 NICU における極低出生体重児の短期予後の検討

新居見俊和[1), 2)]　太田　栄治[1), 2)]　音田　泰裕[1)]
川野　裕康[1), 2)]　瀬戸上貴資[2)]　中村　公紀[2)]
廣瀬　伸一[1), 2), 3)]

[1)] 福岡大学病院小児科
[2)] 福岡大学病院　総合周産期母子医療センター新生児部門
[3)] 福岡大学医学部小児科

要旨：過去 5 年間（2010 ～ 2014 年）の当院における極低出生体重児（VLBWI）269 例の短期予後について検討した．当院の死亡率は 5.2％で，全国平均（6.2％）と同等であった．合併症に関しては，当院では呼吸窮迫症候群が全国より有意に多かったが，脳室内出血は全国より有意に少なかった．治療に関しては，気管挿管と未熟児網膜症に対する治療の割合が全国より有意に高い一方で，在宅酸素療法の割合は全国より有意に低かった．
今回の検討では，当院の VLBWI の短期予後は全国平均に達しているという結果であった．しかしながら，合併症や治療内容に関しては，全国に勝るデータがみられる一方で，呼吸窮迫症候群，気管挿管について未だ全国に劣るデータがみられることも明らかとなった．今回のデータ解析を踏まえて，全国に劣るデータの改善を目指すべく，今後の管理方法の見直しを検討する．

キーワード：極低出生体重児，早産児出生前の母体ステロイド投与，生後早期のインドメタシン予防投与，新鮮凍結血漿の分割使用